

香炉峰下の山居（白居易）

日高く睡足つて猶お起くるに慵し

小閣に衾を重ねて寒を怕れず

遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き

香炉峰の雪は簾を撥げて看る

匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬は仍お老を送るの官 為り

心泰く身寧きは是れ帰する処

故郷何ぞ独り 長安のみに在らんや

日高睡足猶慵起
小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘敲枕聴
香爐峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地
司馬仍爲送老官
心泰身寧是歸處
故郷何濁在長安

解説 香炉峰のふもとに草堂が出来た時、心のおもむくままに、その草堂の東壁に書きつけた詩。

語釈 ※香炉峰Ⅱ廬山の一峰で、その峰が香炉に似ているので、この名がある。

※山居Ⅱ山の家。※草堂Ⅱ草庵。草ぶきの家。※慵Ⅱおつくうである。※小閣Ⅱ小さな家。草堂をさす。※衾Ⅱしとね。夜具。※伯Ⅱおそれる。※遺愛寺Ⅱ香炉峰の北にある寺の名。※敲枕Ⅱ枕を斜めに立ててじつと耳を澄ませて聞くこと。

※撥簾Ⅱ擾は跳ね上げる。小間使いにでも簾をはね上げさせたのだろう。※匡廬Ⅱ廬山のこと。※司馬Ⅱ州の次官軍事をつかさどる職。※心泰身寧Ⅱ心も身体もやすらか。※帰処Ⅱ落ちつくべき所。安住の地。

通釈 日が高く上がり、十分に眠ったのであるが、それでもまだ起きるのがおつくうである。この小さな家で夜具を重ねて寝ているので、寒さも気にならない。遺愛寺でつく鐘の音を枕を斜めに立てて聞き、また香炉峰に積もっている雪は簾をはねあげてながめる。この廬山は世間の名声や名誉からのがれるにはつごうのよい地であり、司馬の官は老後を送るのにはふさわしい職である。心も身もやすらかである事こそが、落ちつくべき所である。故郷は何も長安だけではない。ここも故郷ということができるのである。